特別寄稿

〝天道〟信仰の展開

大分大学名誉教授
九州東海大学教授
富　来　隆
（大分市・志手）

（はじめに）　先稿で、「大入島・日向泊の地名について」この日向（ひうが）という語が、太陽崇拝＝天道信仰＝と結びつくものであって、当地は高千穂峯からと英彦山からとの両天道線の交わることによる地名である、と記した。

それについて、高千穂のほうは合点がゆくが、英彦山のほうはすこし遠すぎるのでは、という疑問がよせられた。先稿が、当地の「日向」のことに限り、またあまり短文だったため分りにくかったことによろう。

本稿は、それを補なうためのものである。

まず地図を作ってそれによりながら、天道線のもつ意味と英彦山の重要性とが納得されるよう努めたい。各地の「日向」を同時にとりあげることも考えたが、紙数をふやすのみであり、さし控えた。本稿では、もっぱら英彦山の天道線に関連して述べることにする。

◇　◇　◇

日本古代に、太陽崇拝の思想によって、天皇を「日ノ御子」と仰ぐ思想が確立する。それが世襲カリスマにと発展したこと、多言を要すまい＝。そしてこの思想は、一般社会にもふかく根ざすものとなっている。

＝カリスマについては、本誌130号「大神惟基を〝あかがりの大弥太〟とよぶことについて」のなかでも述べた＝。

太陽崇拝の、それが道教によるつよい影響について、重松明久氏や福永光司氏らの著述は、説得力をもって私たちにせまる。

そして、道教だけではない、仏教においても、インドから北上して砂漠の世界に入るとき、太陽崇拝とむすびついて「大日如来」などが生まれる。

この太陽崇拝が、色濃く、日本にも入ってきたのである。

さて、重松氏の近著『日本神話の謎を解く』には、英彦山をもって和製の崑崙山とすることを、くり返し述べられる。そして、

「とくに崑崙山伝承が、高千穂峯との関連で注目される。中国の神話・伝説に出る崑崙山は空想の山である。現在中国にある崑崙山ではない。」（P137）「崑崙山は天帝の降臨する山である。……道教界において崑崙山が信仰された。この山が道教界の「日の神」で……。」（P138）といわれる。

――傍点、筆者――

そして私自身としては、氏の主張の正しさを、この天道線をもって裏づけすることができるのではなかろうか、と考えている。

筋道としてまず、〝天道〟のことについて、永留久恵氏の所説にきこう。氏の著『古代史の鍵・対馬』には、「天道聖地」として、つぎのように述べている。

「天道信仰は……聖地崇拝で、祭神も社祠もないものが多い。……天道信仰の中心地である下県の豆酘と、上県の佐護とに共通していることは、天道山の頂に磐座があって、山麓に遥拝所がある。山全体が聖域で、昔はみだりに登ることを許されなかった。……

『対州神道誌』には「天道」または「天道地」としてあげられたものが十四ケ所ほどあるが、……記載もれがあるようだ。……

天道信仰の本質は、日ノ神（テントウサマ）を祭る古い習俗だと思われる。それが修験道と習合したとき、天童法師とよばれる偶像が出現したのである。」

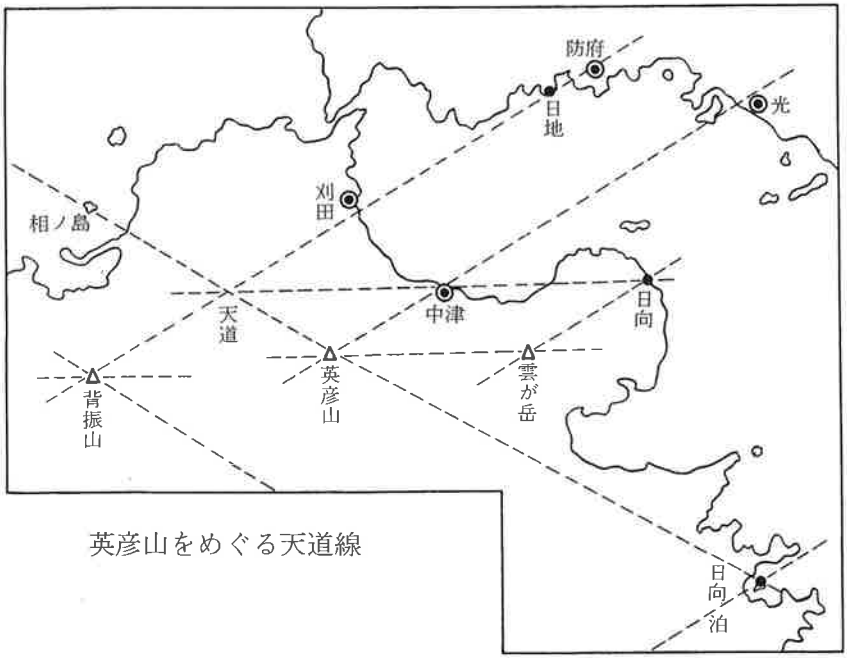
（P210～212より）

天道崇拝とは、このようなものであった。

これが、北九州の地に、どのように現存してみられるか。本論に入ろう。

◇　◇　◇

北九州にも、「天道」の地名がいくつかある。一は、福岡県嘉穂郡の穂波町にあり（駅名てんとう）。二は、大分県玖珠郡の玖珠町（川の北）にある（駅名きたやま



英彦山をめぐる天道線

だ）。まだ他にもあるかも知れないが、地図で見つけ出すに至ってない。しかし今はこれで十分である。

さて、穂波町の「天道」は、その東南30°に英彦山を控える地にある。英彦山から東南30°に線をのばすと、大分県を斜めに横切って、豊後水道にいたり、佐伯の大入島・日向泊にたっすること、先稿に記したとおりである。

これを逆に、英彦山から西北に30°の線をのばすと、「天道」の地をすぎ、玄海灘の海岸、新宮町（FIあり）に出て、さらに相ノ島（新宮FIあり）をすぎ、とおく対島の鶏知（けち）にとおよぶ。

もっとも、これだけでは何故「天道」の地が此所に存するのかは分りにくい。そこで此所を交点として考えてみると、分りやすくなるだろう。

この「天道」から西南に30°の線をひいてみると、三郡山があり、霊峯宝満山があり、その先が太宰府市である。ここに観世音寺があり、都府楼址もみえる。それをさらに西南にのばすと、背振（せぶり）山に達する。もう、これでよいだろう。いうまでもなく、背振とはソウル（所夫里）の音写であり、名だたる聖山である。

「天道」とは、英彦山からと背振山からとの、両天道線の交わる土地柄なのである。

さて、つづいて「天道」から逆に、東北に30°の線をのばそう。これは、香原（採銅所で有名）をすぎ、京都郡に入って刈田町の南をよぎる（著名な古墳群あり、御所山古墳・石塚山古墳など）。そして海（周防灘）をわたって、山口県の日地から防府市（昔の娑婆ノ津）に到達する（ここには、大日・高井の古墳群や、女山古墳群などがある）。古墳群を特記したのは、他でもない。これは大変なことになったからである。

『日本書紀』にみる、景行天皇の九州西征は、この娑婆ノ津から海（周防灘）をわたって、刈田の地に来られた。天皇の渡航された路は、まさに天道線そのものである。天皇は「日ノ御子」であり、「日ノ御子」であるがゆえにこそ、天道線にのって九州に来られたのである。かつて神武天皇が、大和に入ろうとして長髄彦に勝たざるとき、「日ノ御子」が太陽に向って戦うことの不可なるを悟って、熊野から迂回して東に行かれたという故事も、これと同工異曲であろう。天道線とは、こういう意味ももっているのである。

もうひとつ、英彦山から東北に30°の天道線をのばしてみる。すると豊前海岸で山国川河口（中津市）の闇無浜（円および大塚あり）にたっする。この「闇無」とは、文字こそちがえ、「日向」・「日出」などと同じ意味の語ではないのか ═ あるいは、より強烈な反語でさえある ═。そしてさらに線をのばすと、周防灘をわたって山口県の光市に到達する（光井、大塚などの地名あり）。もう十分であろう。

さて終りに真中の線、英彦山から東西にのびる天道線のことを考えなくてはなるまい。英彦山から真東にと線をのばすと、妙見山をすぎて雲ガ岳（御許山の南峯）に至ることがあけられねばならない。さらに東には立石から、熊野の磨崖仏（大日如来）もある。だが何といっても、この雲ガ岳との東西線のために、英彦山ではその東北にわざわざ「豊前坊」がつくられていることが注目されよう。

この宇佐の聖山、雲ガ岳から東北に30°の線をひいてみると、これまた聖地なる西叡山をすぎて、国東半島の東岸、国東町富来の大恩寺、日向の地に至る。ここにも日向（ひうが）の地名がみえるのである。

そして大事なことは、さきの「天道」の地からも東にと線をひくと、これが中津の闇無浜をすぎ、国東半島に上陸して猪群山を通り、その東端は、これも大恩寺、日向へと向うのである。日向とはよくぞ付けた地名であることよ。

重松氏が和製の崑崙山と見立てた英彦山は、まことに聖なる山であり、そこからのびた天道線の光芒は、かくも鮮烈なものであった。まことに、彦＝日子たるにふさわしい山名である。

大分県南の佐伯から、英彦山はけっして遠い山ではない。そこに彦岳の名をもち、彦宮三所神社をもって祭ることは、英彦山信仰が生きつづけた何よりの証拠でさえある。

＝先稿の末尾（P28）に、大宮八幡宮と記したのが、じつは彦宮三所神社の誤まりだったことを、後から気付いた。お詫び申し上げ、訂正させていただく＝。

大入島の日向泊が、英彦山から東南に30°の天道線の先端に位し、高千穂から東北に30°の線との交点にあたることの意味は、ほぼ諒解されたのではなかろうか。佐伯からみて、英彦山はけっして遠い聖地ではないのである。

だが、まだ素直にうなずいてもらえない向きがあるかもしれない。それらの方には、自分で地図をにらんで、なお天道線をひっぱってみられることをお願いする。地球をめぐる太陽の道は、まこと壮大なものである。だからこそ天空神として、全世界的に、信仰の対象となっている。またドルメンやメンヒル、また立石（地名）などが、この信仰とむすびつくものであることは周知のところ。興味を覚えられる方は、さしあたりエリアーデ著作集（全11巻、せりか書房）のうち、第一巻『太陽と天空神』、第二巻『豊饒と再生』などをひらいてみられるよう、お奨めする。

ところで、まだ大分県玖珠町の「天道」のことがそのままである。もはやふれる余裕がない。ただ、試みに、この「天道」から東南に30°の線をひっぱって、南郡との関係を考えていただきたい。高千穂からの東北30°の大入島にいたる線とは、「左間ガ岳」で交わる。この周辺でみるべきものがありはしないか。海岸ちかくではどうなっているか。

最後に、祖母山のことに一言ふれたい。

祖母山もまた聖山である。故北村清士氏が『直入郡史』

に、この山の西麓に「添利山神社あり」と記されている。添利（そうり）が、背振と同じようにソウル（所夫里）の音写であることは明らかである。だからこそ、大神ノ惟基にかかる大蛇神婚譚が存し、カリスマ惟基の存在が伝えられるのである。その朝鮮語による理解については、本誌に記したことがある。そして、ここ神原の「穴ノ森さま」から東北30の線をひいてみると、これが臼杵の深田（石仏群・日）にたっしている。ここはまた、先稿に記したように、英彦山から東南30の線がすぎてもいる。

天道信仰を考え、そのため天道線を地図に求めると、このように新たな証表がつぎつぎと明示されてくる。「日ノ御子」たる天皇にかかる伝承だけではない。神社だけではない。道教、また仏教にもふかくかかわり、さらに詳細にみてゆけば、古墳・遺跡・伝承などとも関連するところが多い。まことに驚くべきことと言わねばならない。

（あとがき）　いずれはさらに詳述するときがあると思います。現在、とくに古代「豊国」の名義についての考察をすすめているので、これに関連して、まとめてみようと思っています。

（昭五九・八　）